

[AW-1] 授賞式

司会：森 正樹（大阪大学大学院 消化器外科学 I） 山本 雅一（東京女子医科大学病院 消化器外科）

日時：2015年7月16日（木） 11:00～11:45 会場：第1会場(アクロシティ浜松 1階 大ホール)

AW-1-1 JSGS Science of the Year2015（学術部門）：職業性胆管癌の病態と対策

久保 正二:1

1:大阪市立大学大学院 肝胆膵外科学

2012年、1,2-ジクロロプロパン (1,2-dichloropropane:DCP) やジクロロメタン (dichloromethane:DCM) の長期間、高濃度曝露を受けた印刷事業場 S 社の従業員に胆管癌が多発している事例が報告された。その17例の診断時年齢は25歳から45歳で、全例男性であった。胆管癌診断のきっかけは、腹痛や黄疸などの症状、 γ -GTP 高値などの肝機能異常、腫瘍マーカー上昇や超音波検査での異常所見であった。画像診断上、腫瘍像、胆管狭窄像、主腫瘍による末梢側胆管拡張像に加えて、胆管狭窄を伴わない限局性肝内胆管拡張像がみられた。主腫瘍は腫瘍形成型や胆管内発育型肝内胆管癌や乳頭型肝外胆管癌であった。広範囲の胆管に前癌病変である biliary intraepithelial neoplasia (BillIN) や intraductal papillary neoplasm of the bile duct (IPNB) がみられ、さらに慢性胆管傷害像や γ -H2AH 陽性胆管上皮がみられた。したがって、本病態は、広範囲の DNA 損傷を伴う胆管傷害から BillIN や IPNB 病変を経て浸潤性胆管癌に至る発癌過程をとると考えられた。なお、従来から指摘されている胆管癌の危険因子はみられなかった。

この事例を受けて、2013年3月、厚生労働省による「印刷事業場で発生した胆管がんの業務上外に関する検討会」によって、(1)胆管癌は、DCM または DCP に長期間、高濃度曝露することにより発症し得ると医学的に推定でき、(2)本件事業場で発生した胆管癌は、DCP に長期間、高濃度曝露したことが原因で発症した蓋然性が極めて高いことが報告された。2013年10月1日には、DCM や DCP にさらされる業務による胆管癌が業務上疾病に分類され、この胆管癌が職業性胆管癌と認識されることとなった。さらに、2014年、International Agency for Research on Cancer (IARC) によって、DCP が group 1 (carcinogenic to humans) に、DCM が group 2A (probably carcinogenic to humans) に変更された。

2015年2月末までに、大阪の印刷事業場 S 社の17例と他地域の印刷事業場の19例の計36例が職業性胆管癌と認定されている。なお、他地域の職業性胆管癌症例においても、S 社症例と同様の所見を示す症例が多くみられた。

現在、大阪市立大学医学部附属病院内に職業性胆管癌臨床・解析センターを設立し、全国の職業性胆管癌症例の臨床データの集積や DCP 曝露従業員の検診結果の解析等から、職業性胆管癌の詳細な病態解明や適切な治療法の確立を目指している。